津田塾大 多文化・国際協力学科

フィールド学習に重点

UPDATE 知の現場

津田塾大学の多文化・国際協力学科が、フィールドワークを中心とした教育方針で注目を集めている。英文学科と国際関係学科の横断コースだった多文化・国際協力コースが、人気の高さから2019年に学科として独立した。学生一人ひとりが関心のある研究テーマを見つけ、事前調査をし、フィールドワークをして卒論につなげる。教師陣はサポート役として見守り、学生の自主性と行動力を育む。

「カンボジアで伝統食と環境問題の関係を研究したかったが、新型コロナウイルス禍で海外に行けないので国内にフィールドワーク先を移した」。3年生の佐々木恩愛（おね）さんは、国際協力に興味があり19年度に入学した。ボランティア活動を通じて関心が高まった、カンボジアに関する研究テーマを選んだが、コロナ禍で断念。調査先を秋田県に変更し、2月に秋田の伝統食であるハタハタずしを研究した。

佐々木さんは当初、ハタハタずしについて昔ながらの味を守ってきたからこそ伝統食になったと考えていた。だがフィールドワークを通じて「県外の人にも食べてもらえるよう、こうじを使わなくなったことがわかった」。こうして「食べ方を変化させることが伝統食として生き残る秘訣だった」という発見があった。今後は新潟県の海藻「えご」を研究対象に、海女さんに聞き取り調査をする予定だ。

東京都国分寺市の農家でキュウリの収穫など農作業を手伝いながらフィールドワークの手法を学ぶ津田塾大学の学生㊨

津田塾が同学科を新設した狙いについて、経営企画課の斉藤治人課長は「フィールドワークを通じて国際社会に必要とされるコミュニケーション能力を身につけ、国際的な課題を主体的に解決できる女性を育てる」と語る。

学科が求める、国際性や普遍性に富んだテーマは国内でもみつかる。例えば茶道。佐々木さんの同級生の田中志歩さんは父親が茶道の家元で、茶道がどう生き残っていくべきかのフィールドワークを自身が表千家の茶道教室に通いながら模索している。

武士や商人がたしなんでいた茶道がいつしか嫁入り修業の一つに。今は外国人やビジネスパーソン、定年退職した人など多様な人々がその芸術性にひかれ、稽古している。田中さんは「伝統文化は同じことをやっていると思われがちだが、変化している。これからどう変わっていくか、観察していきたい」と語る。

2人の担当講師の八塚春名氏は13人のゼミ生を抱える。「生徒は身近なところでテーマを見つけることが多く、学習塾などアルバイト先でフィールドワークをする人もいる」と話す。学生の興味を尊重し「責任を持ってデータを取ってこられれば、基本的にはどこで何をしてもいい」という徹底した自由主義だ。

入学当初は「先生が敷いてくれたレールのうえを行けばいい」と思っている学生も少なくない。「フィールドワークはどこに行くんですか？」と質問する学生も毎年いる。こうした受け身の姿勢は「それはあなたが決める」（八塚氏）と一蹴され、主体性を身につけていく。

「自分のフィールドを持つことが大事」という八塚氏は「自分の軸ができればほかの分野への想像力も湧く。例えば東南アジアの研究をしてもアフリカの問題が身近に感じられるようになる」と説く。その多角的な視点や考え方がこれからの国際社会を生き抜く力になると信じている。（高橋里奈）

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。